正法眼蔵随聞記　5−15

亦云く、人の心は決定人の言ばに随ふと存ず。大論に云く、喩へば愚人の手に摩尼珠をもてるが如し。人是を見て、汝下劣なり、自ら手に物をもてり、と云を聞ておもはく、珠はおしゝ、名聞は深し、我は下劣ならんとおもふ。思ひ煩ふて、猶を只名聞にひかれ、人の言ばについて珠を捨て他人にとらしめんと思ふほどに、終に珠を失ふと云云。人の心はかくのごとし。一定此の言ば我為によしと思へども、名聞にさへられてそれに順はざるもあり。亦一定我為にあしき事と思ひながらも、名聞の為なれば先づ随ふ人もあり。悪にも善にも随ふときは、心は善悪につるゝなり。

故にいかにもとより悪き心なりとも、善知識に随ひ良人に馴るれば、自然に心もよくなるなり。悪人に近づけば、我心にも初めは悪しと思へども、終にその人のこゝろに随ひ、馴るほどにおぼへず、やがて実に悪く成なり。亦人の心ろ決定して他に物をとらせじと思へども、他人強てこひぬれば、にくしとおもひいやながらも与ふるなり。亦決定して与へんと思へども、便宜なく時すぎぬれば、亦やむ事も有なり。

然あれば学人たとひ道心なくとも、良人に近づき善縁にあふて、同じ事をいくたびも聞見るべきなり。この言ば一度聞いたらば重て聞べからずと思ふことなかれ。道心一度起したる人も、同じ事なれども聞くたびごとに心みがかれて、いよいよ精進するなり。

亦無道心の人も、一度二度こそつれなくとも、度度聞ぬれば霧露の中に行が如くいつぬるゝとも覚へざれども自然に衣のうるほふが如くに、良人の言ばをいくたびも聞けば、自然にはづる心も起り実の道心も起るなり。

故に知たる上にも聖教をばいくたびも見るべし。師の言ばも聞たる上にも重て聞べし。いよいよふかき心有べきなり。学道の為にさはりと成べき事をば重て是に近づくべからず。善友にはくるしくわびしくとも近づきて行道すべきなり。